日本文学研究資料叢書

お伽草子

有精堂

本文学研究資料叢書

伽草子

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書
ISBN4-640-32501-0

お 伽 草 子

定価 3200 円
昭和 60 年 6 月 20 日 発行

編 者 日本文学研究資料刊行会
発行者 有精堂出版株式会社
代表者 山 崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町 1-39
発行所 有精堂出版株式会社
電話03(291) 1521～3番
振替口座 東京 9—40684

Printed in Japan
ISBN4-640-30031-X C3391

『日本文学研究資料叢書』刊行に際して

日本文学の研究は、戦後三十数年を経て、再検討と新しい方法への模索が試みられ、転換期にあると言われております。そうした状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。

本叢書はそうした要請に答えて、日本文学研究の未来に賭けられた可能性のために刊行されたものです。

今や、国文学界も、マス・コミュニケーションの時代は避けられず、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、その氾濫は真の学問的交流を阻害するようになっているようにさえ見えます。尨大な著作・雑誌・紀要等々が刊行され、それらのうちには、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったように、種々の困難が、そうした錯綜の上に重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした時代の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本叢書は有効的な役割を果す決意で刊行されたものです。

本叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効的に提供することを目標としたものです。また現代の日本文学研究の動向が、本叢書によって総覧でき、今後の進路を導く羅針盤でありたいと希望しております。

日本文学の研究者、特に若い未来にのみ存在する研究者に、本叢書の趣旨が期待され、支援され、永続的な事業として継続される力を与えて下さるように願ってやみません。

日本文学研究資料刊行会

目次

御伽草子論考……島津久基…一
御伽草子攷……笹野堅…一三
中世の小説……市古貞次…三三
*
郷村制成立期に於ける町衆文化……林屋辰三郎…三三
*
伝本から見た御伽草子二十三篇について……松本隆信…四四
物語草子と説話文学……藤井隆…五六
室町期物語の一絵詞資料……徳田和夫…六九
——お伽草子性・座頭の語り・狂言と室町小歌——
*
「住吉物語絵巻」の文学史的背景……友久武文…九五
『しのびね物語』の位相……神野藤昭夫…二二
——物語史変貌の一軌跡——
『文正草子』再読……佐竹昭広…一三六
『物くさ太郎』の歌より……浅見和彦…一三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

怪物退治と異類婚姻――『御伽草子』の構造分析――……小松和彦…一四二
『おようの尼』考……秋谷治…一五八
御伽草子『壺の碑』の成立……濱中修…一七二
講経談義と説話……永井義憲…一八〇
――『鶯林拾葉鈔』に見えたるさゝやき竹物語――
中世小説と説話――やや奇矯な試論――……村上学…一八七
熱田の深秘――中世日本紀私注――……伊藤正義…一九五
謡曲草子化の一典型――「百万」と『百万物語』の場合――……橋本直紀…二〇四
国籍類書本『源氏供養双紙』を繞りて……徳江元正…二三〇
*
諏訪本地・甲賀三郎……筑土鈴寛…二三一
――安居院作神道集について――
「御伽草子」と昔話……大島建彦…二四五
昔話と御伽草子――『藤袋の草子』をめぐって――……福田晃…二五七
*
室町物語の挿絵小考……美濃部重克…二八一
足利義尚所持狐草紙絵巻をめぐって……宮次男…二九一
*
お伽とお伽衆……松田修…二九八

*
解　説　――お伽草子研究の来歴と今日――……徳　田　和　夫…三二
お伽草子研究　主要参考文献……徳　田　和　夫…三四
執筆者一覧……三三〇

御伽草子論考

島津久基

一

御伽草子の定義並びに範囲に関しては、その対象が稍漠然としてゐ、雑駁でもある為、諸家の説区々で、極めて狭義に取扱はうとするもの、仮名草子との限界を単に時代区劃に拠らうとするもの、及び構成上・性質上或は創作態度の上から等諸種の観点から説かうとするものなど、様々ある。試に明治以後の諸説で主なものを挙げてみる。

(い) 所謂文正草子以下の二十三篇（日本小説年表）

(ろ) 二十三篇に新編御伽草子所収の二十篇を加へた四十三篇（冨山房名著文庫新撰御伽草子はしがき、関根博士）〔但し同書には四十三篇外のものを二篇まで収めてある〕

(は) 足利時代の小説の総称（国文学史概論、芳賀博士）

(に) 室町時代の短篇小説（日本文学大系第十九巻解説、尾上博士）〔此の見地から同書には猫の草紙を除外してある〕

(ほ) 室町時代の通俗小説（日本文学講座第七巻、佐成謙太郎氏）

(へ) 「室町時代より戦国時代に亙りて出でたる御伽噺の性質を帯びたるもの」（鎌倉室町時代文学史、藤岡博士）

(と) 「十七世紀（足利中世より徳川の初世）に出でたる小説の一種」（アストン著、芝野六助訳補、日本文学史）

(ち) 南北朝頃から徳川初世までの草子（新編御伽草子はしがき、萩野博士）

(り) 「室町時代より江戸時代初期にかけて婦幼の読物として述作せられし小説」の「概称」（有朋堂文庫御伽草紙緒言、藤井博士）

右は狭義から広義へ、又、時代の範囲も説明も大体に於て漸次広く詳密な方へと順序立てて並べてみたのであるが、発表の年代に随へば、大略(ち)(い)(と)(へ)(は)(り)(に)(ろ)(ほ)かと推定せられるから、さう置き換へてみると、一層諸説が入り乱れて、今以て統一を看てゐないことがよくわかる。兎も角以上の諸説を更に整理すると、(一)篇数を限定するもの　(二)室町時代と限るもの〔(へ)も含めることにする〕(三)徳川初世に亙るとするもの、との三様に大体帰着するやうである。

さてその三の中、(一)は以下説く所によつても、当らざる事おの

づから明らかである。又(二)は瞭然としてゐて、取扱上頗る簡便であるが、本質的に妥当であるか疑はしいものがあり、且大抵は製作年代不明の作がちであるから、室町期か徳川期かを認定する事困難な場合が多い点にも直ちに賛し難いものがある（尚、前章「御伽草子・仮名草子・舞の本参照）。上掲諸家の説中ではやはり萩野博士及び特に藤井博士の見を先づ最も穏当として私は採りたいと思ふ。

二

御伽草子といふ名称は何時頃何人によつて与へられたか詳らかでない。江戸時代初期の仮名草子に御伽物語・伽婢子・続伽婢子・御伽比丘尼等の作があり、浮世草子になると、新伽婢子・御伽人形・御伽百物語・御伽平家・御伽厚化粧・御伽名代紙衣・御伽夜話・御伽太平記及び御前御伽・拾遺伽婢子・当世御伽曾我・怪談御伽桜等、「御伽」の語を冠し或は含んだ書名が盛んに流行した状勢の中から生れ出た称呼か（勿論、此の称呼の発生は同時にその実体の発生を意味するものではなく、それまでに存在し展開してゐた寧ろ前時代の小説の一群に適用せられただけに過ぎない）、若しくは逆に御伽草子の名が此等御伽何々流行の俑を作したのか、何れかであらう。前者の場合とする想像も大略自然として許されるが、それにしては御伽草子の名が以上の諸書名のどれもが単独的なのに比して余りに汎称的である点が一考に値し、且、伽婢子の自序の文が「学智ある人」の為でなく「只児女の聞を驚かし云々」と宣言してゐるに観て、婦幼の読物たる事を予想してゐる事明白である（伽婢子の書名が亦それを明示してもゐる）から、目的と態度とに於ては御伽草子と殆ど限界なきもので、従つて伽婢子の名も御伽草子や御伽物語に倣つたかとの推測も可能でない事もない（少くとも御伽物語には倣つたのであらう）。但し、所謂御伽草子類を、室町時代から或は少くとも仮名草子時代以前に、御伽草子と呼んだかは猶徴証が無い。例の文正草子以下の二十三篇も、寛文・貞享・元禄頃の書籍目録には各篇それ〴〵「草紙」の部に出てゐるのみで、未だ総括した御伽草子としては取扱はれてゐない（萩野博士・朝倉氏も既に指摘して居られる）ので――舞の本は既に三十六番として一括して載せてあるにかゝはらず――此の点からは後者の仮設を確める資料とはなり得ない。

三

けれども御伽草子の称呼が江戸中期までには播布してゐた事だけは確である。そして大略室町時代の小説をその名で呼んでゐた事は認められる。かの二十三篇は享保の頃か大阪心斎橋順慶町の書肆渋川清右衛門が揃ひの体裁で同時にか或は次々に刊行した叢書の一群で（享保の頃とするは、有朋堂文庫本の藤井博士説に随ふ）、爾後現今まで、狭義には即ち此の二十三篇を指して御伽草子と称してゐるのは誰も知る通りであるが、二十三篇に限る事は、此の叢書としての刊行といふ偶然の事実に基づく外、何等必然的な意味を見出し得ない。又、その当時、此の叢書の総括的名称として御伽草子の名が用ゐられたか、或は単に御伽草子たる各篇を一揃へとして出したが故に自然総括して此の叢書名を御伽草子と呼ばれるに至つたか（萩野博士の推測では「元禄の頃などにや名づけけん、尚考ふべし」とし、朝倉氏の小説年表には「享保以後に附せし名称なるべし」と言つてある）。それも明確な挙証が無いが、「享和元年冬至日」の自序ある尾崎雅嘉の群書一覧（巻之三、草子類）に、

御伽草子　二十三巻

一名御伽文庫といへり。中古の草子どもをあつめたるものなり。撰者つまびらかならず。

として、「第一文正草子」から「第二十三横笛草子」までの書名を挙げ、

以上二十三帖也。○此中第十六巻ねこの草子に云、天下たいへい国土安穏かゝるめでたき御代にあふこと、人間は申におよばず鳥類ちくるゐにいたるまで、有がたき御せいだうなり。まことに堯舜の御代にもすぐれたることなり。まづけうちやう七年八月中旬に洛中にねこのつなをときてはなちたまふべき御さたあり云々。○按ずるに此二十三帖のうち、文正・はちかづきの類は中古のさうしにして此猫の草子などわちかきものなる事、慶長の年号にてしられたり。猶此類の草子あまた有、写本にて流布するもの枚挙にいとまあらず。

と明記してあるから、その頃までに右二十三部が御伽草子若しくは御伽文庫の名で一般に迎へられてゐた事だけは疑ふ余地はない。但し、同じ享和元年十二月刊の合類書籍目録大全には、「舞書・草子」の条に、舞はやはり三十六番で出てゐるのに、御伽は依然各篇個々の名で出てゐて、御伽草子の名称は載せてないから、それら書籍目録が従前の慣行を踏襲してゐるに過ぎないが為とはいへ、二十三部を総括しての御伽草子の名称は却つて猶未だ玄人仲間に固定的には行はれてはゐなかつた——汎称としての御伽草子の名称は通俗に用ゐられてゐても——のではあるまいかとも思はれる。その代りに右の群書一覧の記述によつて、

㈠ 中古——即ち現時でいふ近古乃至中世——の小説の一群を、兎も角御伽草子或は御伽文庫の名で蔽うてゐる事実、而してその一群とは例の二十三篇であること。

㈡ その二十三篇を一団として取扱つた撰者は不明であること（出版者が撰者たることも有り得るが、そして渋川がさうであつたかも知れぬが、群書一覧の著者は別に撰者或は集輯者の存在を予想してゐると観ていゝであらう。）

㈢ 文正・鉢かづき等は明らかに徳川期以前の小説として認めてゐること

及びその他に、更に

㈣ 此の二十三篇以外に、写本で流布してゐる同類の草子が無数に存する事実を認めてゐること

が知られるのである。

四

二十三篇の撰者が出版者と同人であつたとしても、なかつたとしても、此の二十三篇が狭義の御伽草子といふ称呼を占有するに至つた契機は、別に深い根拠があつたのではあるまいといふ事は、上記の事由から想察するに難くないが、二十三篇以外をも御伽草子と呼んだ明証は他にもある。即ち享和元年から二十九年後の文政十三年冬十月の自序ある喜多村信節の嬉遊笑覧（巻三、書画○絵双紙）に、

（上略）是等も古へ絵巻物にてありしなるべし。後世足利将軍の頃に至りても、さま〳〵作り出たる物多しと見えて、今、しほやきぶんしやう・鉢かづき・浄るり十二段の類、御伽双紙と称ふる物の内に収む。今女子婚礼の棚飾に用るは古風の遺れるなり。是を巻双紙と称ふるは……（下略）

又、同書同条に

御伽さうしの内には猫のさうしといふも有り。

とも見えてゐる。十二段草子は創始期の浄瑠璃詞章の一種でもある

が、新編御伽草子（下）にも収められてゐるのが偶然でないと言へる。萩野博士輯の新編御伽草子は、其の名を題してある屋代弘賢旧蔵の写本で、古人の誰かが二十三篇の御伽草子に倣つて撰輯を試みたものであるが、「と称ふる物の内に収む」といふのは叢書を意味する如き書き振である――「御伽さうしの内には」といふのが、例の二十三篇の一群を意味するのは明白である――から、十二段草子を含む点からしても、或は信節は此の新編の方をも閲読してゐて、それを指して斯く言つてゐるのではないかとも思はれる。何れにせよ、

㈠ 文正・鉢かづき等を御伽草子と称してゐること

㈡ 此の頃までには、狭義の御伽草子の名称も多分漸次に広まりつゝあつたらうこと

それに――そして最も注目すべき――

㈢ 十二段草子をも何等怪しまずに御伽草子として取扱つてゐること

だけは否定することは出来ない。㈢に就いては、幸若舞曲の浜出・築島が御伽草子としての取扱をも受けてゐる事実に見ても、十二段草子が即ち草子といふ名でも呼ばれ、又浄瑠璃姫物語とも言はれてゐた事実に徴しても、奇とするに足らないのみか寧ろ当然と言つてもよいであらう。

ついでに、それから八年目の天保八年に出た種彦の偐紫田舎源氏の二十五編下に、

まづお伽草紙の出来はじめ、鉢かづき姫・塩売文正、これを合せて言争ふ。

といふ一節がある。これは絵合巻に擬したので、御伽草子の絵合とは恰好の思ひつきであるが、文正・鉢かづきを御伽草子の祖といふのは、

まづ物語の出来はじめのおやなる竹取の翁に字津保の俊蔭を合せて争ふ。

といふ源語の文をそのまゝ模したのであるから、考証的の意味は先づ無いとみる方が正しいであらうが、これを御伽草子中の最も古いものと見ようとしてゐる意志は認めていゝであらうし、群書一覧や嬉遊笑覧の記載と併せて、徳川期に於ける御伽草子観の一、並びに御伽草子といふ詞の出典の一資料としての価値は在る。

更に、文政十三年（天保元年）から十七年（天保八年からは十年）後の弘化四年に成つた山東京山の歴世女装考（巻二、〔十五〕髪筋をかんざしといひし事）の文中に引いてある「富士人穴草子」の説明として、その下に「東山殿比のお伽さうし、寛永九年板全二冊」と割註してあるから、これこそは二十三篇以外――そして亦四十三篇以外にも当る――でも御伽草子と呼び、而も室町期の小説を然く呼んだ事実に関する的確な資料を提供するものである。

そこで、かの二十三篇に御伽草子の名を与へたのも、その撰者或は書肆渋川が初めではなくて、それまでに室町期小説に与へられてゐた汎称を当然用ゐたまでで、又古書籍目録類にも特に御伽草子の名の見えないのは、却つてそれが単独書名でなくて汎称なるが為で（仮名草子・浮世草子の場合も同様かと思はれる）あらうとも想像されるのであるが、前掲の資料が何れも比較的後世のもので、渋川の出版した享保以前の資料でない点に即断を許さざるものがある。

が、要するに、御伽草子の名を近古小説の汎称として用ゐる事は十分に妥当で、近時の文学史上の術語としての用法が、広義に――即ち二十三篇以外にまで――拡張されてゐる事に、以上の資料は正しい史的根拠を与へるものでなければならぬ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五

猶、群書一覧所見の御伽文庫なる一名に至つては、果して一般にどの程度に行はれたか一層不明で、他にこれを徴すべき文献の資料に乏しい。それは兎も角として、此の名称は或は嫁入文庫式の意味を含むものであるかも知れない事は、嬉遊笑覧の前掲の文と、嫁入文庫として御伽草子数種を入れた書庫の伝存する事実等からも想像を可能ならしめる。又、冊子の読初めとして、正月に文正草子を女が読む慣例があり、昔は家々に必ず一本を具へねばならぬことになつてゐた由が、やはり種彦の用捨箱（巻上）に見えるが、恐らく結婚の際はその草子類をも携へて行つたに違ひない。要するに御伽文庫の文庫は今日での所謂ビブリオテークの意味、又叢書としての意味のそれでもあると同時に、それよりは寧ろ婦幼の御伽——教訓と娯楽とを併せた——の為の座右装飾兼用の書庫の意味を有するものと解して差支なからうと思ふ。つまり飾棚の役目をも務める家庭文庫といふつもりであらう。現時では、森・松村・鈴木・馬淵四氏同撰の標準日本御伽文庫の名称（これに類した名の同種の叢書は猶いくらもある）などがこれから出てゐると思はれる位のもので、御伽草子の一名として国文学史上の術語としては殆ど用ゐられてゐないやうである。

六

体裁・内容・表現・思想、何れの視点からしても、御伽草子と仮名草子とは密接し混合し交錯してゐるが、仮名草子といふ名称すらも、必ずしも御伽草子と区別する為の称呼ではないやうである。元来、仮名草子は「仮名法語」と同様の用法に依る名称で、仮名で書かれた乃至仮名に和らげて説き語られた草子といふ程の便宜的な大まかな名称であり、御伽草子も娯楽と教訓とを兼ねた婦幼大衆の読物といふ程の意味で名づけられてある為に、両者が相重なるとしても寧ろ当然でなければならず、表現様式（同時に創作態度をも含んでゐるが）の側からと、創作態度の側からとの交錯分類的称呼なるが故に、互にその分野を相犯しても却つて自然で必然であると言へる。即ち御伽草子は一面仮名の草子——即ち一種の仮名草子——であり、又、仮名草子に前に挙げたやうに御伽何々と題した作の続出してゐる現象（浮世草子にまで此の傾向が引続いてゐることも初めに触れた）も少しも矛盾ではないのである。

だから享保十九年に成つた寒川辰清の近江輿地誌略（巻一七、日吉社）に「秋夜長物語といへる仮名草紙」と言つてゐるのなども、例の二十三篇のみを御伽草子とする考、若しくはもつと広義の御伽草子といふ概念の上からの判然たる態度では恐らくなくて、単に漠然とか或は仮名草子式体裁で行はれてゐる秋夜長物語（寛永十九年板本などは即ち仮名草子の体裁である）を目してさう呼んだに過ぎないのであらうと思ふ。（芳賀先生の国文学史概論には此の物語を初め鳥部山・松帆浦等の児物語を、中古物語の系統と観て、御伽草子から除外してあり、日本文学大系も御伽草子の外として収めてあるが、これも一つの見解であり取扱ひ方であるから、無論それで誤ではないけれども、御伽草子中の恋愛物語の一種として取扱つても亦不当でなく——現に同種の弁の草紙・花みつ等は文学大系本にも御伽草子中に入れてある。——寧ろ便利とさへ言へる。日本文学講座「御伽草子研究」の佐成氏の態度もそれである）故にかやうな態度からは、広義の御伽草子に属すべき作をば一般には漠然と仮名草子とも呼んだのもあらうことが想像せられ得る。体裁の上からなら

ば寧ろその方が普通であつた筈で（小説年表の朝倉氏や「仮名草子」に於ける水谷不倒氏の取扱態度もこれである）貞丈雑記（巻一六）に

書物はかな草紙にても何にても数多見れば見る程智恵を増す也。なま学文の族は、かな草紙などをば嘲り、手にも取らざるはあやまり也。かな草紙にも能き事は如何程も有り。見ずして打置くは惜しき事也。

と言つてゐるそれも、御伽草子――広義の――を含むとみる方が正しいかと考へられる。

又、歴世女装考の「東山殿比お伽さうし」と言ふのも、群書一覧や嬉遊笑覧に徳川期に入つてからの御伽草子の存在を認めてゐるのと併せ考へれば、徳川期乃至は室町末のでない即ちかなり古い頃の御伽草子といふ意味にも解せられ――東山殿比とことわつてあるだけに――随つてそれより新しい御伽草子をも予想してゐることも考へられる。（尤も、ほんたうは中古の御伽草子と言ふ意味を、もつと時代的に稍明確に言はうとしただけなのでもあらうし、又新しい作が徳川期にまで亙つて出てゐるといふ正確な挙証にはなり得ないが、この頃は所謂二十三篇の名称としての御伽草子も、亦その中に「慶長七年」の語の見える猫の草紙の含まれてゐることも、京山は十分承知してゐた筈と思はれるから。）

七

汎称としての御伽と仮名との名称の交錯してゐると同時に、個々の作品については一層界線が朦朧としてゐる。三人法師・朝顔の露の宮などは仮名草子の領域に近い作であり、おもかげ物語・法妙童子・万寿の前などは、寧ろ仮名草子として取扱ひたい位近世的の臭のする作である。文正草子が塩売文太物語、二十四孝が二十四孝絵抄と、仮名草子化した題号に改められて行はれたりしてゐる一方、一本菊は少将鞍馬物語と御伽草子風に改題せられてもをり、又、監物草子や藻屑物語はお伽草子めいた題号ながら、実録体の物で、強ひて何れかに属せしめようとすれば、仮名草子に入れる他はない。又御伽草子に潤色が加へられて仮名草子になつてゐるのもある。「ふくろふ」乃至うそ姫物語のあだ物語に於ける、あめわかひこ物語の「たなばた」に於ける如きその例である。

併し、文学現象としては――且特に転向期に於ける文学史的現象としては、此の事は当然過ぎる位当然で、特に相類した性質の小説群であるから、両者の中間に位して双方に跨るやうな作が幾多存在せねばならぬ筈である。結局、江戸時代初頭は、御伽と仮名と両種が相並行し相重なつて行はれた期間があると看るべきである。

八

前に御伽草子の範囲に関して藤井博士の説に左袒したいと言つた理由が、今まで論述し来つた所でおのづから明らかにせられたと思ふが、猶これと同じやうな意味で、私は更に上へも――萩野博士よりも一層――延長して、鎌倉末から徳川初世までと時代の範囲を拡げたいのである。勿論、今茲に的確に鎌倉末と指摘し得るものは無いが、そしてその数も多くはあるまいと思はれるが、室町期に入つてから突如発生したと看ねばならぬ必要は無く、平安末期の物語文学の流れを承けた鎌倉期小説に引続いて、徐々に鎌倉末頃から御伽草子式形態が絵巻の冊子化と共に成生しつつあつたと想像する事が自然でもあり、現存御伽草子類の小説中にも、鎌倉末の作ではないかと思はれるもの（例へば土蜘蛛草子の如き）、或は原本がその頃

に存したらうと思はれるもの、又は散佚物語でその頃の作にかゝると想像せられるもの等もあるからである。

平安　鎌倉　室町　江戸

物語文学……

……御伽草子……

……仮名草子……浮世草子

（絵　巻）

故に私は、仮に在来の慣行に随つて御伽・仮名の名称を用ゐる場合には――御伽・仮名・浮世等の慣習的名辞を以てするが文学史の術語として最適であるかは疑問であるが――大体、御伽草子を鎌倉末から江戸初期に亘る童話味を帯びた通俗小説、仮名草子を江戸時代初頭に行はれた啓蒙文学（純小説と言ひ得ないやうなものもあるから）といふ概念の上に立つて取扱つてゐる。勿論これは原則として本態としての観方で、実際は簡約な定義的に総括することは甚だ無理であり、且、個々の作品に臨むと此の問題は、一層面倒になること前に述べた通りである。

が、概しては無論、御伽草子を室町時代の小説の汎称とする事は決して不当でない。御伽草子の特色を発揮してゐるのは室町時代に於てであり、又主なる御伽草子は多く室町時代の作であり、そして室町時代の小説の代名詞としてはやはり御伽草子を以てするのが最適であることは、何人も容認する所であらう。仮名草子と区劃する最も主な要因が、やはり室町と江戸といふ時代区分、同時にその時代色の差違であることも争はれない事実である。即ち、室町のものは御伽草子、江戸のものは仮名草子といふ通念が、極めて普通の文学史的常識としては簡便に用ゐられてよい場合が許されねばならぬであらう。

九

児物語の一類を中古物語系統の小説として御伽草子から除外する事に相当の理由があるとするならば、同じく中古物語文学の系統を引く今宵少将物語・鉢かづき・小落窪・小町草紙等の恋愛物や継子物や歌物語やをも同様の理由からして除外してもいゝ筈である。否、御伽草子のすべてが中古の物語文学の流れを承けてゐる小説と言つてよい。崩壊期に於ける物語文学の各種相が――他の諸種の文学形態との混融とによつて一層――此の雑然たる群小作品となつて名残を留めてゐる――同時に新興文学への萌芽を胎生させつゝ――と観ることが最も正鵠を得てゐると言はれ得る。

天稚彦物語・秋月物語・青葉の笛物語・若草物語・今宵の少将物語・桜の中将物語・玉水物語・俵藤太物語・胡蝶物語等々の題名が直接物語文学を継承してゐる徴証を示してゐるといふのでは必ずしもない。又、何々草子といふ題名でなければ純御伽草子とは言はれないといふ確然たる理由もない。御伽草子の題名としての「物語」と「草子」とは、内容上又は形態上その間に何等の相違は認め得られない。文正草子の「草子」はこれを「物語」と更へても形態上に幾許の変化を来すものでもなく、唐糸草子を唐糸物語と改め、若草物語を若草草子と改めても内容上些の不都合を生ぜぬのである。否、福富草子は一名福富長者物語である。三人法師物語は一名三人懺悔草子である。岩屋草子は即ち岩屋物語であり、弁慶物語は即ち弁慶の草子なのである。雨やどりも亦その一名しぐれのえんを、更に略しては、しぐれの草子とも亦しぐれ物語とも両様に呼ばれてゐる。十二段草子が浄瑠璃姫物語とも言はれてゐることは前にも述べた。呼び慣れてゐる為固定してしまつてゐる題名を他にしては、物

語と草子との転換は甚だ自然に容易に行はれ得るほどに区別が無い。これ亦恰も御伽草子と仮名草子との関係に似たやうな交錯分類的称呼であるが為で、内容と体裁とそれ〴〵の側からしての互に撞著することの無い名称が、一作品の上に共存し得るのは当然である。

勿論、大体、「物語」は小説の意味が、或は叙述の意味が強く、「草子」は記録・随筆の意味が勝つてゐるのではあらうし、平安時代では兎も角先づ区劃が認められてゐるが、後世に降るに随つて其の劃線が糢糊として来てゐる証は、弘安源氏論義に、

あるはみちのさゝはらのわりなきを人に言ひ、身をうぢ河にひきて世中をうらみ来つるに、浮舟も身を投げ、宮も思ひやるかたなしと慰みにけりと聞く人は、源氏の草紙を見てぞ思ひやりける。

とあるのでも知られる。これは古今序に模した文であるが、兎に角鎌倉中期にはもう、源氏物語をすら草子と呼んでゐる以上、室町頃に、物語と草子との間に境界線を絶して来てゐても毫も怪しむべきではないのである。

又同じ小説の意味としても、物語と草子とは、少くとも幾分心持の上で、長篇と短篇といふほどの区別があるとも見られ得るが、それも決定的ではなく、大略感じとしてのことである。田村の草子などは寧ろ長篇としての性質と分量とを有してをり、単に長さ、分量の上からすれば、鶴の草子の方が玉水物語よりは大きく、富士の人穴草子は梅津長者物語の二倍の大きさである。源氏のやうな長い物語でも猶草子と呼ぶことが許されるのならば、それだけでさうした問題は殆ど問題にならないほど既に半ば以上解決してゐると言ふも不可ないであらう。

そして此の物語と草子との界線の撤せられて居る混沌曖昧な心持は又やがて仮名草子との界線の朦朧としてゐるにもおのづから共通するもので、同時に、思想的・信仰的・道徳的各般に亙つて、特に知的論理的に明確な判断力や選択意識の稀薄になつてゐる近古思潮の一面を語つてゐると言へる。そして又御伽草子の内容種別が殆ど雑然混沌としてゐることにも、構想・詞章が套型・不統一・蕪雑・一律なことにも、他の同代各種文学との連接が同様に混錯的であることにも、亦相応じてゐるのである。

一〇

内容の性質・主題乃至取材等の上から便宜的に御伽草子を類別してみることは或程度に可能である。作者の不明な、個性の無いやうな雑多の群小作品はおのづから幾つかの類型を成してゐる。

(一) 童話（一寸法師・物臭太郎・福富草子・文正草子等）

(二) 寓話（猫の草紙・魔仏一如絵詞等）

(三) 異類物（イ）〔擬軍記物〕魚鳥平家・鴉鷺合戦物語・墨染桜・仏鬼軍等。（ロ）〔擬歌合物〕虫歌合・鳥歌合・調度歌合等。（ハ）〔恋愛物〕のせ猿草子・ふくろふ・玉虫の草紙・朝顔の露の宮等）

(四) 本地物〔縁起物〕（貴船の本地・毘沙門の本地・熊野の本地・月日の本地・さよ姫等）

(五) 仏教法談物（さゝれ石・宝満長者・大仏供養物語・胡蝶物語等）

(六) 遁世物（イ）〔発心譚〕硯破・朽木桜・さいき等。（ロ）〔懺悔譚〕三人法師）

(七) 継子物（鉢かづき・秋月物語・岩屋の草子・小落窪・花よの姫等）

(八) 恋愛物 (イ)横笛草紙・今宵の少将物語・桜の中将物語・松風村雨等。(ロ)〔児物語〕秋夜長物語・鳥部山物語・幻夢物語・あしびき・弁の草紙等)

(九) 歌物語 (和泉式部・小町草紙・橋姫物語・伊香物語・小式部等)

(十) 怪異譚 (イ)〔変化物〕化物草紙・付喪神・土蜘蛛草子等。(ロ)〔怪婚説話〕鶴の草子・木幡狐・かざしの姫君・天稚彦物語等)

(十一) 霊験譚 (狐の草子・蛤の草紙・周防の内侍等)

(十二) 英雄譚 (イ)〔怪物退治説話〕酒顚童子・田村の草子・立烏帽子・俵藤太物語等。(ロ)〔地獄極楽廻説話〕富士の人穴草子・天狗の内裏等。(ハ)〔武人伝説　特に義経伝説〕鬼一法眼・弁慶物語・秀衡入・木曾義高物語等)

(十三) 復讐譚 (あきみち・はもち中将・てこぐま物語等)

(十四) 孝行譚 (二十四孝・唐糸草紙・法妙童子等)

(十五) 祝儀物 (七草草子・大悦物語・梅津長者物語・浜出等)

右は各代表的な作品に就いて例示してみたのであるが、御伽草子の各篇を大体以上の類別に分属せしめる事が出来るであらう。併し、中には右の何れにも属せしめ難いやうなのもある。又右の類別が已に便宜的な交錯分類である。その上に以上の諸作品各々が互に共通した成分を多く有し過ぎてゐて、他の種別と重複し相跨ってゐるものがちであると言ってもよい。

即ち物臭太郎は本地物でもあり、幻夢物語は復讐譚でもあり、土蜘蛛草子は英雄譚でもあり、狐の草子は怪婚説話でもあり、人穴草子は法談物、蛤の草紙・周防の内侍は孝行譚、田村の草子・伊香物語は霊験譚でもあり、仏鬼軍は法談物で又寓話、鉢かづきは童話で又恋愛物語でもあり、さよ姫は孝行譚で又霊験譚でもある。

要するに、異類物は略々一種の寓話でもあり、継子物は大抵恋愛物語でもあり、本地物・遁世物並びに霊験譚は勿論宗教物であり、復讐譚は英雄譚にも孝行譚にも連接してゐる場合が多いのであるから、もっと整理して、(い) 童話 (ろ) 寓話 (は) 宗教小説 (に) 恋愛小説 (ほ) 英雄小説 (へ) 怪談小説等と分つ方が妥当であるが、更にそれを各細分するとすれば、その場合亦必ず交錯を惹起して来ることを免れない。御伽草子の各篇の内容を形成する要素は実に多様的で、而も共通的で、それら各種の要素のいろ〳〵の配合が、此の雑然混淆の御伽草子群を生み出してゐるのである。

一一

此の御伽草子の世界を醸成してゐる諸要素は、又同代の他種文学の各々とそれ〴〵出入連繋してゐる同じ要素である。特に英雄譚・復讐譚・及び説話的要素は軍記物並びに舞曲——前にも述べた如く浜出・築島等は最早全然区別なく御伽草子中に伍してゐる。——及び謡曲の一部と分担してゐるものであり、田村の草子・俵藤太物語・弁慶物語・鬼一法眼等、いづれも軍記物中の一種型たる当代の歴史小説義経記・曾我物語と類種若しくはその抜萃を成すが如きものである。異類合戦物は言ふまでもなく直接軍記物から派生したそのパロディである。本地物・法談物・遁世物・霊験譚・怪異譚・孝行譚・寓話等は、今昔以後特に近古に最も異常の展開を遂げた説話文学及び之に密接な関係を有つ仏教文学の領域であり、その通俗化・小説化であると言へる。謡曲の思想と取材とにも相連ること亦詳述に及ぶまい。祝儀物も此の時代に限るわけではないが、神事祝言の能や舞曲の小ぶし物に通ずる気分であり、当代から近世へかけ

ての各種の歌曲類には欠かされない慣習のやうになつてゐる。語り物・謡ひ物としての軍記・謡・舞曲と共に此の頃から新しく発生して来た浄瑠璃との錯綜も、亦前に説いたやうに已に十二段草子に於て歴然と例証して居り、そして近世初期の古浄瑠璃類の台本に御伽草子がそのまゝ或は少改変を施されて使用せられた事実、又語り物化の痕跡を留めてゐる御伽草子の現存する事実、及び新作古浄瑠璃の世界も御伽草子や舞曲の創造する世界と相遠からざる事実等は、此の方面に於ける両者の交渉を十分に物語つてゐる。仮名草子との関係及び平安朝物語との関係は既に述べた。以上の諸種の文学形態は各〻それ〴〵の本質と分野とを有してゐるが、或は思想に於て或は素材に於て、或は表現に於て或は態度に於て、将た鑑賞者の範囲に於て、御伽草子と各〻頗る近似し密接してゐるものが多い。軍記物中の義経記・曽我物語や舞曲や古浄瑠璃の如きは文体まで御伽草子に非常に近い。童話の進出も神話時代の新しい再生であり、竹取・宇津保や源氏の玉鬘巻等の転生でもあるが、平安末からの民間口碑の記録説話乃至文学作品化への成長であると共に、此の期には外来移入の方域が拡大せられて、素材にも種型にも内国的に局限せられることから更に一層解放されようとしてゐる。

畢竟、御伽草子は縦にも横にも其の隣接区域との界線が茫漠としてゐる。而もそれが此の特異な文学形態の著しい特色の一である。

一二

雑然茫漠としてゐる御伽草子の特質は、それながらに一種の面白味を生み出してゐる。混沌・蕪雑・無造作・無整理の無数稚小群、その事が、そして又その現象が、何となく漠然たる暢達さ、生れながらのそしてあるがまゝの自然さ、而も不思議な一の大きな力の存在にも似たものを感じさせる。

それから御伽草子だけにしか味はれないやうな、半貴族的半庶民的な、かなり野趣に滲んではゐるが未ださうまでは物質的打算的肉感的になりきらぬ、何処かに大まかな間の抜けたやうなノーブルなところのある、所謂「もとの根ざし賤しからぬが」、安らかにといふほどではなからうが、身上だけの事は流石にあつて「いとかはらかなりや」と言ひたい位の程度に踏み留つてゐる姿、といつたやうなものを見せてくれるのが御伽草子から受けるさまで厭でない印象の一である。微温さはあるが、その微温さとしての味が如何にも上品であるからである。醜穢な低級に堕してゐない雅びな卑しさの味であるからである。

一三

今一つ御伽草子の与へてくれる有難いものは、それが有つ立派なナンセンス味である。狂言や落語や滑稽本やと共通したものを有してゐるのは言ふまでもないが——特に狂言とは最も近似してゐるが——それらは明らかに笑を目標として居、その為に作意が感じられ過ぎ、屢〻意識的なくすぐりにすらなつてゐる。御伽草子のナンセンス味は、不用意で無自覚で邪気が無いだけに一層愉快であり、真正であり、それだけに価値が高いと概言していゝ。明るい喜ばしい馬鹿々々しさ、それこそは御伽草子が恐らく自身予期しない独自の生産価値であり存在価値であらう。

東山道陸奥の末、信濃の国十郡のその内に、つるまの郡あたらしの郷といふ所に、不思議の男一人侍りけり。其の名を物くさ太郎ひぢかすと申し候。名を物くさ太郎と申す事は、国に双びなき程のものくさしなり。但し名こそ物くさ太郎と申せども、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com